

【PV】 双子メイドの御挨拶 「手頃な肉便器を見つけちゃった♪」

姉
「くすくす。」

妹
「くすくす。」

姉
「へー。 御主人様君って、いつもこんな所で寝てるんだね♪」

妹
「うふふ。 男の子の匂いがします。」

姉
「でも… 御主人様君って本当に情けない男だよな♪」

妹
「初対面のメイドに脅されて、無理矢理寢室に案内させられて♪」

姉
「お布団にドーンｗｗｗｗ」

妹
「元気がいいのは最初だけでしたねｗｗｗｗ」

姉
「あはは。 なーに、怖いのか？」

妹
「くすくす。 何を怯えているんですか？ 」

姉
「喜ばなよ」

妹
「安心なさい。」

姉
「いい子にすれば手加減してあげるよ♪」

妹
「素直にしていれば手心を加えて差し上げますね♪」

姉
「あははは。 コイツ、プルプルしてるｗｗｗｗ」

妹
「うふふふ。 この子、震えてますねｗｗｗｗｗｗ」

姉

「いい子にすれば優しいレイプで済ませてあげるね♪」

妹
「素直にしていれば痛くしないであげますね♪」

姉
「でもね？」

妹
「ですが。」

姉
「ちょっとでも生意気な態度取ったらwww」

妹
「少しでも反抗的な態度を取ったら。」

姉
「お仕置きタイムwww」

妹
「お仕置きタイム。」

姉
「あれれー？ 誰がお布団から出ていいって言ったのかなー？」

妹
「あらあら？ 誰がお布団から出る許可を出しましたか？」

姉
「御主人様君の調教は布団の中でやるって言ったよねー？」

妹
「床やお外での調教は礼儀作法をお勉強をしてからですよ？」

姉
「床でゴリゴリ～って、レイプして泣かせるのって調教効果高いんだけどね？」

妹
「あれって私達も痛いんです♪ 身体も冷えますしね♪」

姉
「だからね？ 御主人様君のお布団の中で強姦してあげるね♪」

妹
「ですから。 御主人様のお布団の中で輪姦してあげますね♪」

姉
「あははは。 コイツ泣いてるwww」

妹
「うふふふ。 この子泣いてるwww」

姉
「御主人様君♪ そんなに慌てなくてもね？」

妹
「これから幾らでも泣かしてあげますのに♪」

姉
「ねえ、御主人様君。 まだPVだよ？」

妹
「ねえ、御主人様。 前戯もまだですよ？」

姉
「今からそんな事じゃ。」

妹
「今からこんな事では。」

姉
「苛め甲斐がありすぎるってwwwwwwwwww」

妹
「くすくす。 あーあ。 姉さんに気に入られちゃいましたねーww」

姉
「いやいやー。 サドッ気のある子なら誰だって気に入るよー。」

妹
「このレベルのマゾは流石の私達も初めてですもの♪」

姉
「あはは。 あーあ。 妹ちゃんに目を付けられちゃったねwww」

妹
「くすくす。 こんな可愛いマゾを苛めるのを我慢するなんて、誰にも無理ですよ。」

姉
「あははははww 見て見て！ コイツ、レイプ宣言されてオナニー始めちゃったwwww」

妹
「うふふふふww 信じられませんw この子、調教宣言されてオナニーしてますwwww」

姉
「あははは！
コイツ、自主的に肉便器ポーズとってるwwww」

妹
「くすくす♪
性奴隷になる為に生まれて来たような子ですね♪」

姉
「手頃な肉便器を見つけちゃった♪」

妹
「性欲処理用の使い捨て便器です♪」

姉
「良かったね、御主人様君♪」

妹
「良かったですね。 御主人様♪」

姉
「君はレイプ漬けにされてメイドの奴隷になるんだよ♪」

妹
「オマエはイジメ尽されてメイドのおモチャになるんですよ♪」

姉
「先に本編で待ってなよwww」

妹
「お布団の上で私達の到着を待ちなさい♪」

姉妹
「「最高の悪夢を見せてあげる！！」」

00. メイド様の人格剥奪オモチャ調教 「主人の癖に生意気だぞ♪」

姉
「最初に教えておいてあげるね、御主人様君♪」

妹
「最初に注意しておいてあげますね、御主人様。」

姉
「今、きみ。 アタシ達の事メイドさんって言ったよね？」

妹
「今、オマエ。 私達の事をメイドさんと呼びましたね？」

姉
「口の聞き方には気を付けた方がいいと思うよ？」

妹
「メイド『さん』 じゃないですよね？」

姉
「そうだよ。 普通メイド『様』 だよ。」

妹
「少しは身分をわきまなさい。」

姉
「メイド様を怒らせたなら地獄行きだから♪」

妹
「主人風情がメイドに逆らってはいけませんよ。」

姉
「主人の癖にメイドに生意気な口効いちゃ駄目だよ？」

妹
「目上の者に対しては絶対服従。」

姉
「アタシ達には絶対服従。」

妹
「よし、素直ないいお返事です♪」

姉
「こっちも初日から処刑せずに済んだよ。」

妹
「後、挨拶の時は…
額をちゃんと床に擦り付けなくてははいけませんよ。」

姉
「アタシは優しいから、ちょこっとレイプするくらいで許してやろうと思ってるのね？」

妹
「私も穏便に済ませてあげようと思っていたのですが。」

姉
「アタシの気が変わってからキャンキャン泣き喚いても遅いから。」

妹
「手遅れになる前に心を入れ替えましょうね♪」

姉
「あははは。 解ってくれて嬉しいよ、御主人様君♪」

妹
「くすくす。 反省のフリがお上手ですね御主人様。」

姉
「今から可愛がってあげる♪」

妹
「今から可愛がって差し上げます。」

姉
「でもね、御主人様君。」

妹
「ですが、御主人様。」

姉
「君、ちょっと態度悪いよね？」

妹
「主人の分際で目に余りますね。」

姉
「主人の癖に生意気だぞ♪」

妹
「ちゃんとひざまずきなさい。」

姉
「んー？ コイツ、御挨拶もちゃんと出来ないのかな？」

妹
「ふう。 オマエは土下座も満足に出来ないのですか？」

姉
「両膝はもうちょっとぴっちり閉めようか？」

妹
「額はもっと強く擦り付けなさい。」

姉
「やれば出来るじゃない♪」

妹
「出来るのにやらなかった。」

姉
「じゃあ、減点1だね。」

妹
「ええ、減点1です。」

姉
「あははは。 そう怖がらなくていいよ御主人様君♪」

妹
「うふふ。 そんなに萎縮する必要はありませんよ。」

姉

「持ち点がゼロになるまでに君の調教は完了してるから♪」

妹

「持ち点が残ってる間にオマエの調教を済ませてあげますからね♪」

姉

「それじゃあ、レイプしてあげるね♪」

妹

「それでは、強姦して差し上げますね♪」

01. メイド様の楽しい輪姦タイム 「レイプし易い様にお股『くぱあ』しようねwww」

姉
「御主人様君♪ 君、結構可愛いね♪ 土下座、似合ってるよ♪」

妹
「御主人様。 顔を上げる事を許可します。 あら？ 命令が聞こえなかった？」

姉
「今、妹ちゃんに命令されたよね？ 何て言われた？」

妹
「顔を見せなさい。」

姉
「あははははwww 変な顔www 欲情しながら怯えてるwww」

妹
「なあに？ 期待してるのですか？ それとも恐怖？」

姉
「安心していいよ、御主人様君♪ ちゃんと両方満たしてあげるからね♪」

妹
「あらあら、良かったですね御主人様。 オマエは姉さんに気に入られたみたいですよ。」

姉
「うん！ コイツ気に入った♪ ちょっとレイプしてやり捨てる予定だったけど…」

妹
「ええ、構いませんよ姉さん。 この子はレイプ漬けにして私達の玩具にしましょう。」

姉
「やったー！」

妹
「うふふ。 実は、私も最初からこの子を可愛いと思ってたんです。」

姉
「良かったね、御主人様君♪ マゾの君に喜んで貰えるように頑張っ

てあげるからね♪」
妹
「ふふふ、姉さんの言うことを聞いていれば、間違い

ないですよ。
天国で暮らしているような幸せな日々をお約束しますね」
姉
「あのねあのね。 妹ちゃんに逆らわなければOKだからね♪

心も身体も優しく地獄に落としてあげるからね♪」
妹
「ふふふ、姉さんも私も綺麗好きなメイド。
家具も床もオモチャも、いつだって清潔に保ちますから、ご主人様は快適に過ごせますよ」

姉
「御主人様君は、あたしたちメイド様のオモチャになるんだよおwww」

妹
「御主人様は、私たちメイド様専用の大切な大切なオモチャ。
長く使えるように、ちゃんとメンテナンスしてあげますから安心してくだ

姉
「あははははは！
御主人様君、おびえちゃって可愛い～！」

妹
「くすくす。
御主人様、震えておられるのですか？」

姉
「あたし、この寝室気に入っちゃった！
決めたあ♪
この寝室を、今から御主人様君を調教して飼育する『檻』にしま～す！」

妹
「くすくす。
このお布団から勝手に出た場合、脱獄とみなします。」

姉
「最初に言っておくけど、メイドのお仕置きは怖いよ～？」

妹
「ふふ。 一度でもメイドのお仕置きを見てしまったら…」

姉
「あははは。 みんな、すぐに自分の立場をわきまえるよねwww」

妹
「でも姉さん。 この子はもうわきまえてるみたいですよ♪」

姉
「いっしっしー。 感心感心♪
御褒美にた～っぷり調教してあげるからね♪」

妹
「うふふ。 マゾヒストの御主人様に喜んでもらえる様に、
誠心誠意なぶり尽して差しあげますね♪」

姉
「んー？ あれあれー？
ねえ、御主人様君。
まだ、自分の立場が解ってないのかなあ？
私達がレイプし易い様にちゃんと足を開こうか？
アタシがレイプし易い様にお股『くぱあ』しようねwww」

妹
「…あらあ、姉さんの言うことが聞こえないんですか？
それとも力づくで凌辱して欲しいっておねだりなの？
んー？」

姉
「もう、御主人様君ってば仕方ないなあ！
アタシがこじあけてあげるよ。
——ほら、くぱあ！」

妹
「あははは！
御主人様、簡単に開脚させられちゃいましたね♪
よくお似合いですよ♪
力づくで、くぱあ♪」

姉
「でもね御主人様君。」

妹

「ですが御主人様。」

姉妹

「「もうちょっと自分の立場をわきまえた方がいいよ？」」

02. メイド様の人格剥奪オモチャ調教 「強姦以外でイケない身体に改造してあげますね、御主人様。」

姉
「ねえ、御主人様君。
君、オモチャのクセに服なんて着ておかしいよね？
服を着ていいのはメイドだけだよ？
怒られる前に脱ぎ脱ぎしちゃおっか？」
脱ぎ脱ぎ♪ 脱ぎ脱ぎ♪」

妹
「ふふふ。
オモチャの包み紙を開ける瞬間ってときめきますよね。
ん？
オマエ、動きが緩慢よ？」

姉
「さあ！ 今回のオモチャはガラクタかなあ～！」

妹
「それとも、高級品でしょうか？」

姉
「アタシはガラクタがいいなあ♪
アタシ、ガラクタをバキバキ壊すのがだあ～い好き♪」

妹
「私は高級品がいいです♪
高級なオモチャを滅茶苦茶に壊す瞬間♪
ソクソクします♪」

姉
「さあ、すっぽんぽん、すっぽんぽん！」

妹
「全部脱ぎなさい。」

姉
「ガラクタかなあ～」

妹
「高級品でしょうか？」

姉
「コイツ、ちょっとトロいね。」

妹
「この子、動きが緩慢です。」

姉
「教育かな？」

妹
「教育ですね。」

姉
「あ、ごめんごめん♪
アタシってば御主人様君のこと怖がらせちゃったあ～？
ごめんねえ、そんなつもりなかったんだよお～♪」

妹

「御主人様の体が早く見たかっただけなんですよ。
そんなに泣かないでください。
脱ぎ脱ぎお上手ですね。
いい子いい子。」

姉
「わあ、えら～い♪
ぜ～んぶ脱げたね♪」

妹
「えらいえらい。
御主人様は素直なお利口さんですね♪」

姉
「御主人様君の体。
弱そうwww」

妹
「こういう鈍い子って苛め甲斐がありますよね♪」

姉
「御主人様君って、頭も体もトロいタイプでしょwww」

妹
「これなら思う存分使い潰せますね♪」

姉
「御主人様く～ん。
すっぽんぽんの御主人様君♪
もう自分のこと人間だなんて思っていないよねえ～？」

妹
「メイド様専用の玩具になれたこと、ちゃんと自覚してますよね？」

姉
「あははははははは！」

妹
「くすくす。」

姉
「御主人様君、まずは動作確認しよっか？
君が命令通りに動けるオモチャか確認してあげるねえ～」

妹
「不良品だったら、どうなるかわかってますよね？
遊ばれもしないで、バラバラに壊されて捨てられちゃうんですよwww」

姉
「ちゃ～んとアタシの命令通りに動いて、不良品じゃないってこと見せてよ、御主人様君
♪
…大丈夫！最初の命令は簡単だからwww
アタシが手を叩いたら、『仰向け』になるの。どう？簡単でしょ？
幾ら御主人様君でもこの位はできるよねえ～？
——それじゃ、行くよ～。」

妹
「…あっはっはっはっは！
上手上手♪
不良品として処分されたくはありませんものね♪」

姉
「そんなの当然だよwww
御主人様君は、アタシ達を満足させるためだけに存在する、素直なおモチャだもん♪
命令はちゃんと聞けるよね？」

妹
「ふふふ、この、緊張した仰向け、とっても可愛いですよ♪
オマエはメイドのおモチャ。
性欲処理用のレイプ便器。」

姉
「うんうん♪
御主人様君、自分の立場、少し解って来みたいだね♪
君はメイド様のおモチャになるために生まれてきた…
君はね、メイド様のおモチャになるために製造されたんだよお。
御主人様君の体は、全身がおモチャ！
メイド様に遊ばれるおモチャなんだよお～♪」

妹
「うふふ。
姉さん、見て下さい。
このおモチャ、全身にボタンが付いてますよ♪」

姉
「あはは！
本当だ♪

んー？
御主人様君。
君、何キョドってるの？www

いい～？
御主人様君のお鼻はボタン。
このお鼻をポチッと押すと、御主人様君は目をつぶらなくちゃいけないんだよお～」

妹
「御主人様は、不良品じゃありませんよね？
ちゃんと動きますよね？
ゴミ箱の刑は嫌ですよね？」

姉
「それじゃ、いっくよお～。
お鼻のボタンを、『ポチッ！』。
——どうかなあ～、このおモチャ、ちゃんと動くかなあ～？」

妹
「姉さん。　ちゃんと作動していますよ♪」

姉
「よし！　偉いぞー♪」

妹
「おかげで、お仕置き用のボタンを押さずに済みました♪」

姉
「お仕置き用ボタン？」

妹
「爪の間にあるアレですよwww」

姉
「ああ、アレね♪
あそこ、小さすぎるから針でも使わなきゃ押せないよね♪」

妹
「あらあら、この子スンスン泣いちゃってwww」

姉
「よお～し！
この調子で、どんどんボタン押しちゃおう！
次はあ～、ノドボタンだよお～！」

妹
「御主人様、ノドが何のボタンかわかりますか？
これを押せばペラペラ喋り始めるボタンですよ♪」

姉
「御主人様君。
このボタンは大事だよ～？
たまに反応が悪い子が居てね？
つつい強く押しちゃうことがある程なんだ。」

妹
「どんなに感度の鈍い子でも、ノドボタンをちょっと強めに押してあげれば…
凄い悲鳴を上げながらなんでも喋ってくれるんですよ♪」

姉
「ノドボタンはね？
おねだりボタンなんだよ♪」

妹
「このボタンを押すと、オモチャがおねだりを始めるんですwww」

姉
「『いじめてくださーい・いじめてくださーい』ってねwww」

妹
「可愛くおねだりなさいwww　ちゃーんと応えてあげますからね♪」

姉
「じゃあ、早速押してみるね♪
ノドボタンをポチッ！」

妹
「『イジメテクダサーイ』
御主人様www
ちゃんと出来たじゃないですかwww」

姉
「えらいえらい♪」

妹
「偉い偉いwww
最高。
このオモチャ、すっごく面白い
もっともっと押しちゃうよ♪

『イジメテクダサーイ』」

姉
「ノドボタン、ポチッ！」

妹
「イジメテクダサーイ』」

姉
「あはははははははは！
おもしろお〜い！
台詞もだんだん上手になっていったね〜。
でも、そろそろ飽きちゃったから、次の台詞にいてみようか♪」

妹
「次のセリフは、『私はメイド様専用のオモチャです』。
——どうですか？ わかりましたね？」

姉
「だーかーら、試せばわかるって♪
いくよお〜！ ノドボタン、ポチッ！」

妹
「『私はメイド様専用のオモチャです』」

姉
「きゃははははは！
おもしろい、おもしろ〜い♪
どんどんいくよお〜！ 唇ボタン、ポチッ！」

妹
「『私はメイド様専用のオモチャです』」

姉
「ノドボタン、ポチッ♪
あれー？
声が小さいぞー？
不良品かなー？」

妹
「あらあら、不良品ですねー。
接触が悪いようですから、喉仏を押し潰してみましよう♪」

姉
「あはは。
コイツ、何か言ってるしwww」

妹
「ふふ。
ねえ。
オマエの持ち点なんかとっくになくなってるから。」

姉
「んー？
命乞い？」

妹
「居ますよねー。
主人の分際でメイドに何かを要求出来るって勘違いしている子。」

姉

「ノドボタン、ポチッ。」

妹
「『私はメイド様専用のオモチャです』」

姉
「出来るじゃない？」

妹
「出来ますよね？」

姉
「じゃあ、最初から言われた通りにしようか？」

妹
「どうして、最初に言われた通りに出来なかったのですか？」

姉
「んー？」

妹
「んー？」

姉
「ノドボタン、ポチッ♪」

妹
「『私はメイド様専用のオモチャです』」

姉
「きゃ～～！このオモチャ、すごお～い♪
おねだりボタン、すっごくすっごくおもしろいよお！
さっすが、御主人様君！」

妹
「御主人様、良かったですね♪
姉さんはオマエのことを気に入ったようです。
勿論、私もオマエを気に入りましたよ。」

姉
「御褒美に念入りにレイプしてあげるね、御主人様君♪」

妹
「強姦以外でイケない身体に改造してあげますね、御主人様。」

03. 双子メイド様の前戯処刑 「泣くのは犯されてからにして下さいね。」

姉
「御主人様君のこと気に入っちゃったから、もっともっと遊んであげるね～。
次のボタンは、『肉便器のポーズ』に変形するボタンだよお」

妹
「姉さんがおでこボタンを押したら、手を頭の後ろで組むんですよwww」

姉
「押すよお～、おでこボタン、ポチッ！
——うい～ん、がしゅん！」

妹
「そうですwww
手を頭の後ろに組んだそれが、『肉便器のポーズ』ですよwww」

姉
「あはは！ 変形成功www
可愛い♪
君って肉便器になる為に生まれて来た様な子だよね♪」

妹
「うふふ♪ 素敵。
オマエは性欲処理の為に生まれて来た様な子ですね♪」

姉
「動いちゃ駄目だよ♪」

妹
「動く事を禁止します。」

姉
「そうそう、こうやってえ…
んちゅ、んちゅ
お耳ペロペロされても、動いちゃダメなんだからあ～」

妹
「うふふ。 私も頂きますね♪
んちゅ、んちゃ、んんー！
オモチャの感度を開発するのって最高です♪」

姉
「コラァ！お耳ペロペロくらいで、動いちゃダメでしょー♪
んんー、罰として、『乳首コリコリの刑』だよ♪
コリコリコリー♪」

妹
「んふう！ もう、姉さんはすぐに甘やかすんですから。
私は厳罰主義者なので、オマエを『乳首ムギューの刑』の刑に処します♪
乳首、ムギュー！
思い切りつねって、ムギュー！ムギュー！
どうですか、痛いですかあ？それともお…」

姉
「あははは！御主人様君、乳首責められて感じ過ぎでしょ♪

知ってるう？ 乳首感じる男って、真性のマゾ気質なんだよお？」

妹
「仕方ないですよねw
右乳首を私が厳しくギュー！ ギュー！ ギュー！」

姉
「左乳首をアタシが優しく、コリコリコリコリ…」

妹
「ギュー♪ ギュー♪ ギュー♪」

姉
「コリコリコリコリ…」

妹
「同時に、違う刺激で二つの乳首を弄られるなんて…」

姉
「なかなかないもんねえ？
気持ち？気持ち？おかしくなっちゃう？」

妹
「コリコリがいいんですか？
ムギューがいいんですか？
…それとも、いっしょだからこんなに変になっちゃうんですか？」

姉
「男のクセに、乳首勃起www
女の子みたいに、乳首勃起www」

妹
「責められて喜んじゃうなんて真性のマゾですね。
痛くて感じちゃうゴミマゾですね」

姉
「ねえ、マゾオモチャ～♪」

妹
「ねえ、マゾオモチャ♪」

姉
「あははははは！
コイツ、また泣いてるwwwww
鼻水出てるしwwwww」

妹
「うふふ。
泣くのは犯されてからにして下さいね。
格好悪いwww
この程度で泣いてたら、メイド用の輪姦便器は務まりませんよ」

姉
「今日はアタシ達二人だけど。」

妹
「私達のグループは頭数が多いですからwww」

姉
「メイドの輪姦はねえ…
5人以上でやると、いつの間にかリンチになっちゃうよね♪」

妹
「うふふ。
メイドの集団リンチは怖いですよwww」

姉
「やられる子はみんな凄い声で泣き叫ぶからねwww」

妹
「『ここ防音ですよ』って教えてあげたらwww」

姉
「確実に命乞いモード入るよねwww」

妹
「あらあら、御主人様。」

姉
「うわーwww コイツ、勃起してるwwwwww」

妹
「ここまで重度のマゾは初めて見ました♪」

姉
「君。 重症だね♪」

妹
「くすくす。 苛め甲斐のある子」

姉
「御主人様君♪ 今、とってもいい顔だよ♪
ヨダレ凄いしwww
よーし、アタシの指を舐めろ。」

妹
「あらあら、御主人様ったら赤ちゃんみたいwwww」

姉
「コイツ、本当に可愛いなあ。」

妹
「私の指も啜えなさい。
情けない顔www
よし、…もっと舌を這わせろ。
くすくす。 もっともっと堕としてあげますからね♪」

※姉
「ごしゅじんさまくん、だーいすき♪」

04. 双子メイド様の尊厳破壊 「あらあら、可愛いおねだりですね。」

妹
「姉さん、そろそろwww」

姉
「そうだね♪ そろそろwww」

姉妹「「苛めスタート♪」」

姉
「まずは『お・し・り』、犯しちゃおう！
え～い、え～い！
ペシペシペシ～！」

妹
「御主人様♪
次に姉さんにお尻ボタンをぶたれたら、体を横にしましょうねー♪
（からかう感じで）私にオチンチン、姉さんにお尻をイジメられるために、自分で体を横
向きにするんですよお～♪
感謝の言葉を忘れずにね♪」

姉
「きゃはははは、御主人様君♪
はやく、あたしにお尻ちょーだいwww
いっくよお～、お尻ボタン～…、連打連打連打あああ～～！！
ペシペシペシペシ、ペシペシペシペシペシい～www」

妹
「ふふふ、御主人様、えらい、えらい～。
ちゃ～んと姉さんのボタン連打にお礼言いながら、横向きになれましたねえ～」

姉
「あはは、御主人様君のお尻、ひくひくしてるねえ～♪
あたしに犯して欲しくて、アナルがひくひく呼吸してるよお～。
ねえ、御主人様君、女の子みたいに犯してあげるからね。
御主人様君の体の中、あたしが犯して独り占めしてあげるからねえ～」

妹
「ふふふ、御主人様、私も忘れちゃダメですよお～。
ほら、ほらwww
おちんちん、つんつんwww」

姉
「御主人様君♪
君のヒクヒクアナルwww
指でなぞってあげるね♪

ほーら、さわさわー♪

あはは！
コイツ、ヨガってるしwwwwww」

妹
「姉さんのアナル開発、凄いですよ♪
みんな最後は、お尻を必死で突き出して…
泣きじゃくりながらおねだりするんです♪」

姉
「ほーら、君のケツマンコ濡れて来たよ〜。」

姉
「うふふ。 どこを触って欲しいの？」

姉
「おねだりははっきりと声に出そうね♪」

妹
「ケツマンコですよ、ケ・ツ・マ・ン・コｗｗｗｗ」

姉
「ほーら、言ってみなｗｗｗｗ」

妹
「あらあら、可愛いおねだりですね。
くすくす。 この子、堕ちるの早すぎますｗｗｗｗ」

姉
「コイツ、プライドとかないのかなｗｗｗｗ」

妹
「なーに、オマエ。 そんなにケツマンコを苛めて欲しいの？」

姉
「んー？ どうして欲しいの？ 遠慮なくていいんだよー♪」

妹
「うふふふ。 可愛い子♪」

姉
「あははは。 素直で宜しいｗｗ」

妹
「ふふふ。 姉さんのアナル開発が本格的に始まっちゃいましたね♪
私はオマエのおちんちんを楽しませて貰いますね。

この勃起したオチンチンの根元…
大きくてギンギンに猛ったオチンチンの根元…
から、ニミリ離して、こうやってクルクル円を描くように撫でてあげますね〜。
オチンチンの根元をクルクル〜、…ほら、ぞわぞわしちゃうでしょ？
オチンチンの根元をクルクル〜、オチンチンの周りをクルクル〜」

姉
「くはあ〜ん！
妹ちゃんのテクニクで、御主人様君のアナルｗｗ
とろとろに蕩けてきたよお〜ｗｗ
いいねえ〜、いいねえ〜。
これだけ蕩ければ、もっともっと責めれちゃうねえ〜。

…ほら、いくよお〜責めちゃうよお〜。
ほらほら、グイッ！て。グイグイッって！
…ンンー！ああー！すごいよ、御主人様君のケツマンコ、キュンキュン締まってるう〜！

苦しい？ねえ、苦しい？

こんなに指突っ込まれたら苦しい？
んんー！やめないよお～！
御主人様君のお尻が、あたしの指を全部のめるまでやめないよお～！
フィストファックはあたしのお気に入りの遊びなんだからねえ～、うふふ！」

妹
「あらあら、フィスト奴隷に落されると聞いて怖くなっちゃったんですか？
あんなに元気だったオチンチン、縮こまっちゃいましたねえ～。
ダメですよお～、このオチンチンは姉さんと私のおもちや。
もっともっと、ちゃあ～んと立ててくれなきや、遊べないでしょう？

——ほら、こうやって、太もももサワサワ触ってあげますからねえ～。
サワサワ～なでなで～サワサワ～なでなで～。
乳首も優しくイジってあげますねえ～、乳首くにゆくにゆう～、乳首くにゆくにゆう～」

姉
「ほら♪ ほら♪ ほらー♪
いいよお、御主人様君！お尻、またトロトロに蕩けてきたよお～！
ふわっと柔らかくて、あったかくていい気持ち～！

ねえ、御主人様君、女の子みたいに内蔵をズガンッ！って犯される喜びを教えてあげるねえ～！御主人様君は女の子じゃないから、遠慮なんていらないもんねえ～。
頑丈だもんねえ～。
あたしの指、すごいよお～、御主人様君のオチンチンの何万倍も強烈だよお～！
ほら、ぬふぬふぬふー♪」

妹
「姉さん、すごお～い♪
御主人様のオチンチン、かちんかちんですよwww
メイドにお尻を犯されるのが、そんなにいいんですかあ～？
ふふふ、お尻だけじゃなくて、オチンチンもトロトロですねえ～。
トロトロの嬉し涙を流して、スンスン泣いてますねえ～。
ふふふ、美味しそう。
御主人様のトロトロの先走りお蜜味わってもいいですか♪
…ペロンっ。…んふう、美味しい。
もう一口、ペロンッ。
…んふふ、あらあ～、どうしたんですかあ～
オチンチン、ビクビク震えて苦しそう～。
ねえ、苦しいの？ 御主人様、苦しいんですか？」

姉
「ああ～ん、らめえ～wwww
君の苦しそうな顔、たまんなあ～いwww
んふう！その苦しそうな顔見てるだけで、あたし、イッちゃいそおお～～！
御主人様君、イケなくて苦しいんだよねえ、辛いよねえ～。
だけど、まだまだイカせてあげないよお～。
御主人様君、もっともっと責めてあげるからねえ～♪」

妹
「ふふ、いつもの姉さんの意地悪が始まっちゃいましたねえ。
御主人様、このままじゃ、ず～っとお尻イジメられ続けますよお～。
そろそろ、私たちにレイプされたいですよねえ～。
レイプされたいなら、姉さんにおねだりしなくちゃダメですよお～」

姉
「じゃあ、お尻叩いた時だけ、アタシにおねだりさせてあげるねえ～。
——んんー！」

妹
「ほら、おねだりしなさい。
『レイプして下さい』
っておねだりしなくちゃ駄目ですよ。」

姉
「あはは。
初めてのオモチャ調教だから、わかんなくても仕方無いよね♪
次は可愛くおねだりできるよねえ～、御主人様君♪
…（尻叩き）ンンー！！」

妹
「『レイプしてくださーい』」

妹
「『強姦してくださーい』」

妹
「『肉便器のおしごとをさせてくださーい』」

妹
「『メイド様にいっぱい強姦されたいですうー。』」

姉
「いいよお～御主人様君、鼻水垂らして泣きながら懇願する顔がたまらないよお～！
アナルをクリクリ開発されながら、必死でおねだりする御主人様君可愛いよ♪」

妹
「くすくす。 オマエって本当に性奴隷になる為に生まれて来たような子ね♪」

姉
「君は最高の便器だよ♪」

妹
「弱くて不細工で淫乱www」

姉
「最高に手頃な肉便器だね♪」

妹
「姉さん、この子、もうちょっと教育してから次のパーティーで披露しましょうよ。」

姉
「いいねえ♪
良かったね、御主人様君♪
君、AVデビュー出来るよwww」

妹
「輪姦モノのマゾ男優www
有料チャットで世界デビューですwww」

姉
「そうと決まれば、まわす前にいっぱい楽しまなきゃね♪」

妹
「私達がオマエに飽きるまでレイプ漬けｗｗｗｗ」

姉
「壊さないギリギリで強姦するのって難しいんだけど。」

妹
「姉さん、壊れたってかまいませんよｗｗｗｗ」

姉
「そっか、替わりは幾らでもいるもんね♪」

妹
「良かったですね御主人様。 オマエは自由に壊れていいんですよ♪」

姉
「ふああ～んん！いい！いい！いいよお～！
御主人様君の可愛い怯え顔見てたら、またテンション上がって来たよ♪

お尻ズンズンｗｗｗ
お尻ズブズブｗｗｗ
お尻、ズブズプう～ｗｗｗ
ケツマンコ、じゅぷじゅぷ～ｗｗｗｗ」

妹
「うふふ。
やっぱり、御主人様お尻感じてきてるんですねえ～。
オチンチン、元気元気～♪オチンチンからトロトロ蜜が溢れてきてますねえ～
トロトロのお蜜がコポコポ湧いてきて、美味しそう～。」

姉
「ん、ふう～。
御主人様君、可愛い。
ねえ？
お尻の、『ここ』いいんでしょう？
『ここ』たまんないんでしょう～。
すごいよお～、『ここ』すごいよお～。
お尻の『ここ』は、男のGスポちゃんなんだよお～。
ほら、たまらないでしょう～、『ここ』感じちゃうでしょ～？
奥の『ここ』、責めてあげるねえ～。
『ここ』コリコリ責めてあげるねえ～
『ここ』をズンズンズン、ズンズンズン、ズンズンズン…」

妹
「それじゃ、私は美味しそうな御主人様のオチンチン蜜を、ペロ、ペロ、ペロ…、ペロ、
ペロ、ペロ…、ペロ、ペロ、ペロ…」

姉
「君の淫乱ケツマンコ♪
いいの？
こんなのがいいの？
今の君、メスの顔してるよｗｗｗｗ」

妹
「んちゅ♪
れろれろれろれろれお♪

っちゅ♪ 美味しい♪」

姉

「んあ！いい！いいよお、御主人様君！
…んっあ！んっあ！んっあ！んっあ！んっあ！んっあ！んっあ！んっあ！」

妹
「ぺろぺろぺろぺろ、クチュックチュックチュン、ぺろぺろぺろぺろ、ぺろぺろぺろぺろ
…」

姉
「御主人様君、ふうあああ～、お尻トロトロでコリコリでいいよお～！
お尻いいよお～！！んっあ！んっあ！んっあ！んっあ！んっあ！んっあ！んっあ！
んっあ～～んん！！！」

05. 双子メイド様の搾精処刑 「もう何も考えなくていいんだよ♪」

姉
「くはああ～！
はあ、はあ、はあ。
…御主人様君の悶えるメス顔見てたら、あたしイっちゃったよお～♪」

妹
「私も少しイっちゃいました♪
ねえ、姉さん。
そろそろ、おあずけペニスいい仕上がりになってきましたよ。
ほら、触ってあげてくださいwww
カチカチの肉便器バイブができましたよ♪」

姉
「あはッ♪
これなら、あたしも満足できそうだね！
御主人様君、ちゃ～んと肉便器バイブになれたね。
えらいえらい♪
御褒美に身も心もぐちゃぐちゃに凌辱してあげるからね♪」

妹
「姉さん。
この肉便器をハメ倒すのを楽しみにしているんですから
この前みたいに一回で壊さないでくださいよwww

じゃあ、御主人様。
私達が犯し易い様に仰向けになりましょうか？」

姉
「ん？ 何をトロトロしてるのかな？」

妹
「ねえ。
聞こえませんでしたか？
オマエは今、『仰向けになれ』って命令されているんですよ？」

姉
「コイツ本当に鈍臭いなあwww
アタシが跨り易い様に脚をぴっちり閉じろよwww」

妹
「御主人様。
ちゃんと勃起ペニスを真上に向けて下さいね♪
オマエは自分から進んで私達にレイプされるんですよwww」

姉
「見てよ♪
コイツ、レイプするって言われてチンポびしょびしょに濡らしてるwww」

妹
「あらあら。 情けない淫乱便器ですね♪」

姉
「よいしょ。
うふふ、御主人様君にまたがっちゃった～♪
あ、お顔は隠しちゃ駄目だよ？」

妹
「オマエな惨めなアへ顔を楽しみたいですからね♪」

姉
「御主人様君は、もうなあ～んにも考えなくていいんだよ♪
君はもうレイプ漬け便器♪
うちのグループ全員でマワし続けてあげるからねwww」

妹
「オマエの可愛いヨガリ声、期待してますからね♪」

姉
「ふぁ～ん、跨って見つめる御主人様君のオチンチン、すっごくステキ～。
もう我慢できないから、あたしのおまんこに、ハメハメしてあげるねえ～。

いっただっきまーす♪

んふう！
ふうああ…

これは中々。
んんんん♪

君、不細工の癖に名器だね♪
これは当たりを引いたかな♪

あッ！
んんふううう♪

御主人様君の便器バイブが、あたしのまんこに入ってくるよお～！
…ふうあ！ひゅあああ～！

あああ～太い～～！太いのいいのお～！
おまんこいっぱい、クチュクチュいいながら入ってくるよお～～！
ひいああああ～！奥までえ！奥まで早く欲しいよお～！

ズドンって奥までいっちゃうよお～～！
ふうあああ～！
んくう、ズドーン！
——ひゃうううう～～！奥まで御主人様君でいっぱいになったよおおお～～！！」

妹
「ふふふ、姉さんったらさっそくお楽しみですね♪
すぐに肉便器バイブの電源を入れてあげますからねえ～。

御主人様♪
肉便器の振動ボタンってどこだと思います？

んふふふふ！決まってるでしょ～！！
御主人様の、お顔ですよお～～！

顔面騎乗でスイッチ入れてあげますよ♪
んふふふ、私が顔騎したら、オマエのバイブをMAX振動させなさいね。

いきますよお～～！

——御主人様に、顔騎～！んはあ～！
ほら！しゃぶれ！
それじゃ、いきますよお～！

バイブ電源、ON～！！んは！んはあん！」

姉

「きゅあふうう～ん！！
ああ、ああ！お兄ちゃ～ん、しゅごい～～！
御主人様君バイブ、しゅごしゅぎいい～～！ゆっさゆっさ揺れるよお～～！
オチンチンが、Gスポ突きまくるよおお～～んああ！
んああ！きもちいいよおお～～～！」

妹

「んは！んは！んは！
どうですか！顔レイプされながら、姉さんとセックスするのはどうですかあ？
んはあ！んはあ！顔に私のマン汁がこすりつけられているのわかりますかあ？
顔がマン汁まみれですよお！顔レイプいい～～！んはあ！んはあ！」

姉

「こら、御主人様君！
顔騎レイプで窒息しそうでも腰は振り続けなきゃダメでしょ～！捨てられたいのお～！？
もっとちゃん、バイブしてよお～～！
息できなくても、バイブは死なないから大丈夫だよお～
んっ！！
ああああああん♪」

妹

「あふうん！あふうん！
ふうあああ、クリトリス擦れて気持ちいいですう
——あらあ？
御主人様、本当にバイブ弱まちやってますねえ～。
これじゃ、姉さんは満足できなくて可哀想。
仕方ないから、息させてあげましょうか。
顔からどいてあげますね。よいしょっ」

姉

「あひゃあああ～～ん！
御主人様君バイブしゅごい～～！
この肉便器、いきなり激しくなったよおおお～～！
ふあああ～ん！ズガンズガン子宮突いてくるのオオ～～！
子宮壊れちゃうよおおお～～！けど、強烈で気持ちいのおおお～～！！
もっと突いてえええ～～！！」

妹

「姉さん気持ちよさそうで、私も我慢できなくなってきちゃいます♪
ねえ、御主人様、私が耳元でおねだりしてるの、ちゃんと聞こえていますか？
ねえ、御主人様、ちゃんと、私の分のザーメン残しておいてくださいね？」

姉

「くはああああ～！ああ！もう、らめえええ～～！
イっちゃうう～！イっちゃうよおお～！
御主人様君も、イッてええ～～！
あたしの中に、いっぱいあったかいザーメンちょうらい～～！
ザーメンほしいよおおお～！イッてよおおお～～～！」

妹

「（冷静な声で）御主人様、ダメ。姉さんの中でいっちゃダメですよ。
御主人様の最初のザーメンシャワーは、私のものなんだから」

姉
「あああああ～！もうダメえ～！本当にイっちゃう～～！
御主人様君、いっしょにイこうねえ～～！」

妹
「（甘え声でねだる）御主人様、いっちゃダメですう～。
私とイクまで、絶対いっちゃダメですうう～！！」

姉
「あひゃあ～～！激しすぎるうう～！もうイク～～！イっちゃう～～！
御主人様君もイッてえええ～～！！」

妹
「（冷静な声で）御主人様、ダメですよ。絶対にイッたらダメ。
もしイッたら、私、オマエに何をするかわかりませんよお？」

姉
「あ、あああ、ああああ～～！！イクイクイクイク～～！
御主人様君、いっしょにイクよおおお～～！！」

妹
「（冷静に）ダメです。絶対にイッたらダメ。許しませんよ？」

姉
「ひぎいいいい～～！あああ～～！あああ～～！あひひいいい！いぐうううう～～！！
いっちゃうううう～～！！おにいひゃん、いっしょにいごおよおおお～～！！
あああああ！らめええ～！いくううう～～～！！」

妹
「ああ～あ、御主人様もイっちゃいましたね。
私の命令に逆らったこと、後悔させてあげますから、覚悟してくださいね？」

姉
「ふううう～～！
あん♪

いっぱい御主人様君のザーメン浴びちゃって満足う～。
もう！一回でフニャちゃんなんて許さないよおお～！

今度はあたしがお顔レイプして立たせてあげるうう～！
——よいよ！
ほら、あたしのお蜜と、君のザーメンでグチュグチュなあたしのおまんこ
御主人様君のお顔に擦りつけてあげるう。

ほら、すりすり～！ぐりぐり～！
お顔レイプ、御主人様君好きだもんねえ
これなら、すぐに勃つもんねえ～！

んあ！んあ！んあ～！ほら、早くチンポ勃たせないと、御主人様君、窒息しちゃうよおお

～。
あたしは優しくないから、ちゃ～んと命令通り勃起できなくちゃ、死んでも顔騎レイプやめてあげないからね～♪んふふふ～♪」

妹
「ふうあ～！ んふふふ♪
御主人様のオチンチン、美味しそうに育ってきましたあ！
んふふふ♪あんまり立ってないですけど、もういいですう。
私の中で育ててあげますからねえ～～。
んふふふ～♪本当に美味しそう。
はい、下のお口でいただきま～す！

くちゅ、くちゅくちゅ～～！んくう～！ふう～～！ああ～～！
御主人様のオチンチン、私の中に入ってきたあ～～！んはあ～～！！」

姉
「ん～、さすが、御主人様君！
ちゃ～んとオチンチン立たせたね！えらい、えらい！
君は壊しちゃったらもったいないから息をさせてあげるね～。
——よいしょ。
元氣なくなったら、顔面騎乗でスイッチ入れるから、サボっちゃダメだよお～」

妹
「あふう！ああ！御主人様、いい！御主人様、いい～～！
御主人様のオチンチン、美味しいですう～～！
もう離さないですよお～、おまんこキューキューしめて、噛み切っちゃうんだからああ～
～！！んきゅー！んきゅー！」

姉
「んふふ～♪
君の一発目の濃～いザーメンあたしがもらったから…
妹ちゃん、張り切っちゃってるねえ～。
けど、御主人様君は、あたしのもの。
妹ちゃんにも使わせてあげるけど、あたしのもの。
ザーメンはあたし以外のおまんこに飲ませちゃダメだからねえ～、わかってるよねえ～
御主人様君♪」

妹
「あはああ！ んはあ～ん♪ んはあ～ん♪
御主人様、イイですう！
私の濡れ濡れおまんこが、御主人様のオチンチンにグチュグチュに突かれて、気持ちよすぎですう～～！ふうあ～～！
あああ～！狂っちゃうう～～！狂っちゃいますうう～～！
御主人様、いっしょにイッてええ～～！！」

姉
「ダメだよお～。
御主人様君。あたし以外でイっちゃダメだからねえ～。
わかってるよねえ～～？」

妹
「んくう！んくう！御主人様、すごいですうう～～！
もっと私のグチュグチュおまんこ突いてええ～～！
まだあ！まだあ足りないですうう～～！

もっともっともっと私のおまんこオチンチンでめちやくちやにしてしてええ～～！

——ふうあ！ふうあ！ふあああ～！すごっ！ふあああ！
らめええ～～！たまんない～～～！はあああ～！
御主人様、もう来て！早く私の子宮にザーメンちょう～だい～～！
はあああ～！イクうう～～！イクうう～～！」

姉
「ダメダメ～♪
御主人様君、あたし以外でイッたら絶対ダメだよお～。
あたし、許さないからねえ～？」

妹
「あはあああ～～！イクうう～～！
御主人様、しゅごしゅぎるううう～～！ふあああ～～！
イクうう～～！もういっちゃうよおおお～～！」

姉
「ダメ。絶対ダメ。
御主人様君のザーメンは、全部あたしの！絶対いっちゃダメ。
いいね？」

妹
「あはあああ～～！御主人様のオチンチン、私のおまんこの中で暴れてるうう～～！
御主人様も、気持ちいいですねえ～？
うれしい～！うれしいですうう～～！くふうう～～！
もう我慢できなひいい～～！いぐううう～～！」

御主人様といっしょにイキたいよおお～～！
私のおまんこ、御主人様のザーメンでいっぱいにしてえええ～～！
御主人様のザーメン、いっぱい飲みたいおおお～～！
ふあああ～ん！いっぱいちょうらい～～！！」

姉
「ダメ。妹にザーメン飲ませたら許さない。
絶対ダメだからね、御主人様君」

妹
「はあああ！はああああ！イクうう～～！イクうう～～！
もうらめええ～～！ふうあああ～～ん！あああ～！
御主人様、イクうう～～！
私にザーメンちょうらいいい～～！いっぱいちょうらいいい～～！！
あくううう～！あああ～！…いぐうううう～～～！
いぐおおおおお～～！」

妹
「…ハア、ハア、ハア。
ふうあ～ん、御主人あ♪
ごちそうさまでした♪」

姉

「あ〜あ。御主人様君、あたし以外のマンコでいっちゃたねえ？
約束破るなんてひどいんだからあ！
んふふ、処刑決定！
御主人様君がカラカラに干からびるまで、あたしのおまんこでザーメン搾り取ってあげる
からねえ〜？
君、楽に死ねるなんて思っちゃ駄目だよ♪
レイプ漬けにして、死ぬまでヨガリ狂わせ続けてから♪」

妹
「うふふ。
レイプは始まったばかりですよwww」

姉
「御主人様君♪」

妹
「御主人様♪」

姉
「君は肉便器。」

妹
「オマエは性奴隷。」

姉妹
「念入りに犯してあげるからね♪」

EX. 双子メイド様にセックス漬けにされて壊され続ける日常

姉

「んふふ♪ 御主人様君、まだまだ終わらないよお～。
御主人様君のおチンチン、まだまだあたしのおまんこにハメハメしてあげるからねえ～～
。——んふう！んん！くちゅくちゅ、んふう～！
…はあん！ふうああ～！入ったよおおお～～！
御主人様君のおチンチン、全部あたしのおまんこに入ったおお～～！！」

妹

「ねえ、気持ちいい？姉さんのおまんこ、気持ちいい～？
また姉さんのおまんこでイッたら、次はザーメン搾り取っちゃうからね～
それまで、キスを楽しませて貰いますね。」

姉

「んふう！んふう～ん！あっぐう～！りやめえええ～～！
御主人様君、激しすぎいい～！あっくうう～！ああ～！はああ～ん！
御主人様君のおチンチン、大きすぎるよおお～～！はああ～ん！イクウう～～！！」

妹

「ああ～、もう、御主人様、イっちゃいそうですねえ。
いいですよ。
イっちゃっていいですよ。
私に、姉さんの3倍ザーメンのませてくれるなね♪」

姉

「くうう～！あぎいいい～～！
ズドンズドンすごい！
子宮がズドンズドンしゅるううう～～！
くあああ～～！あぎぎぎぎ～～！もうイカせてええ～～！早くイカせてえええ～～～！」

妹

「姉さんをイカせてもいいけど、御主人様、私にザーメン搾り取られて死んじゃいますよ
お～」

姉

「あぐうううう～！いぐううう～～！いぐううう～～！
あひゃああ～～！イっちゃうよおおお～～～！
らめえええ～～～！！」

妹

「ああ～、また姉さんのおまんこでイっちゃいましたね～。
ほら、すぐおチンチン立ててください。
ほら、早くっ！
次はもう私の番ですよ。
肉便器に休憩とかありませんから」

妹

「姉さん、次は私の番ですよ！」

姉
「うん、どーぞ、どーぞー♪
あー。
この便器、本当に名器だわ♪」

妹
「んふふ♪
じつは一、ザーメン絞られた後のオマエののフニャフニャチンポ♪
私の大好物なんですよねえ〜。
このフニャちんを、命令されて必死でたたせる御主人様見てると♪
それだけでイっちゃいそうになるんですよお〜」

姉
「あははは、妹ちゃん、怒ってる怒ってるう〜。
早く立たせたないと、ヤバイよ、御主人様君」

妹
「ほら、早く立たせてください。
ここまでフニャちんじゃ、さすがにおまんこに入れるの嫌ですよ。
…もう、仕方ないですねえ。」

おい、マゾ便器。
立たせろ。
また、痛い目に会いたいのか？

うふふ。
解り易い子♪

姉さん、この子。
苛めれば苛める程勃起しますから♪」

姉
「コイツって、本当に便利な便器だよね♪」

妹
「…ふああ〜！うれしい！
御主人様のオチンチン、かたあ〜く立ってきましたあ！
淫乱チンポ、ジुकジुकです♪」

姉
「わあ！御主人様君、さすがあ〜www
コイツ、バイブ機能だけじゃなくて…
ザーメンシャワーも内蔵されてるんだねえ♪」

妹

「んふう～？ 固く育ったオチンチン、おまんこで食べてあげますねえ～。
んふふふ♪ 美味しそう、んふふふ、ぱくう♪
——はあん！御主人様君のオチンチン、おいしすぎいい～～！
はあうう、はあうう～ん！
子宮がきゅんきゅんするうう～～！あああ～！感じちゃう～～！」

姉
「ふうあ～、御主人様君、すごお～い。
あんだけあたしがザーメン搾り取ったのに、もう元気なっちゃうなんて！
イっちゃえ、イっちゃえ！すーぐイッて、早くまたあたしの番になあ～れ♪」

妹
「あひいい～！あぎいい～～！いいお～～！
御主人様、いいお～～！もっともっと、オチンチンで突き上げてええ～～！
もっともっと、ガンガン腰ふってええ～～！うぐうう～～！
これじゃ、まだまだイキたくないよおお～～！もっともっと私の子宮をついてえええ～～
！
もっともっとオチンチン固くしてザーメンためてええ～～！！
ザーメンいっぱいほしいのおお～～！！」

姉
「うぷぷぷ
ねえ、御主人様君、もうイっちゃいなよ。
うす～いザーメンでイッて、妹に殺されちゃいなよお～
あああ、早くアタシの番にならないかなあ。
君の淫乱チンポをハメハメしたいよお♪」

妹
「あぎぎぎいい～～！御主人様君、しゅごいよおおお～～！
気持ちいいよおお～～！あぎぎぎぎいい～～！
しゅごっ！しゅごっ！しゅごっ！しゅごっ！しゅごいいいい～～！

おまんこグチュグチュできもち～～！
あふう！あふう！あふう！ああああ～～！いぐうう～～！
御主人様、いぐおおお～～！ザーメンちょうらい！
私の中に、いっぱいザーメンちょうらい～！
ふうあ～～！ザーメンちょうらい～～～！！！」

妹
「…ふうあ。…ふうん、…ふうん。
もうダメえ、ダメえ、ダメえ～、ザーメンでおまんこいっぱい気持ちい～」

姉
「ふふふ、あ～あ、御主人様君、またあたし以外でいっちゃった～。
もう～、君のザーメンは、全部あたしのにしたいのにい～。
——だから、ね、また次はあたしの番。
ほらほら、オチンチンすぐに立たせて～。
できなきゃバキバキに壊して捨てちゃうよお～、早く早く～。
犯されるのが大好きな淫乱肉便器君♪
早く早くう～。早くオチンチン立たせて～、んふふふ♪」